



パーキンソン病患者による 居住空間の評価

形岡 博史

Hiroshi Kataoka

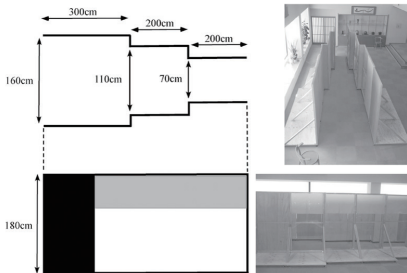
脳神経内科学／准教授

■キーワード 運動機能障害に応じた住宅環境

臨床

シーズ概要

近い将来身体能力の低下した高齢者が増加の一途をたどり、住宅改造の必要性が増すと予想される。従来、個人の動ける能力にあわせた改造を施されていることが多いが、より良い住宅環境を整えるには運動機能障害を起こしうる疾病も考えていく必要がある。なかでも、特有の運動機能障害を示す神経変性疾患について住宅環境の問題点を知ることは重要である。特にパーキンソン病 (PD) 患者は増加の一途をたどると予想され、その特有な症状である姿勢反射障害や歩行時のすくみのため転倒への危険性が増す。我々は、独自に作製した階段状に狭くなる廊下 (図) を使用し、姿勢反射障害のある独歩可能な PD 患者を対象に歩行解析を行い、廊下の歩行時間と速度、歩数は狭い入り口部に到達する前に顕著な変動を示し、その変動は直線上に狭くなる廊下で軽減した。また、その PD 患者を 10 年間追跡することで、階段状に狭くなる廊下での歩行変容が前頭葉機能低下によって生じ、病期進行のリスクになることも明らかにした。さらに PD における住宅環境の問題点を明らかにし、疾病に応じたより良い住宅環境を目指している。



研究成果の応用可能性

パーキンソン病(PD) 以外の類縁疾患や健常高齢者へも応用できる。

Appeal Point

アピールポイント

疾病の症状に応じたより良い住宅環境を目指している。

関連文献／特許

1. Eur Neurol. 2011;66 (5) :298-304.
2. Eur Neurol. 2012;68 (5) :276-8.
3. Eur Neurol. 2014;71 (5) :187-192.
4. Journal of Neurology. 2015;262(9) :2049-2055.
5. Eur Neurol. 2018;79 (3-4) :118-124.
6. Neurology: Clinical Practice. 2021 Jun;11 (3) :e261-e266.